

令和 3 年 6 月 24 日現在

機関番号：17301

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K17606

研究課題名(和文)1歳6か月児を持つ母親の育児不安と内的作業モデルとの関連性

研究課題名(英文) Association between mothers' attachment styles and parenting stress among Japanese mothers with toddlers aged 18 months

研究代表者

キット 彩乃(KIT, Ayano)

長崎大学・医歯薬学総合研究科(保健学科)・助教

研究者番号：70789320

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：養育者の高い育児不安は虐待要因の1つであり、重要な公衆衛生学上の問題である。1歳6か月児を育てる母親を対象に育児不安と母親のアタッチメントスタイルとの関連を明らかにすることを目的としてA市における1歳6か月児健診にて質問紙調査を実施した(配布質問紙数：1,399枚、回収数：529枚、回収率：37.8%)。多変量解析の結果、両価/不安型のアタッチメントスタイルを持つ母親は安定型を持つ母親より有意に育児不安が高くなった。一方で回避型の母親と安定型の母親では育児不安に有意な差が認められなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

人生の早期に形成された愛着は生涯において変化しにくく、育児期の母親のアタッチメントスタイルは妊娠期間においても同様の型が示される可能性が示唆される。妊娠時から保健師が母親のアタッチメントスタイルを何らかの方法で把握することで育児期のリスクファクターを捉えることができ、予防的支援に繋げることが可能となる。今回の研究で両価型の母親において有意に育児不安が高いということが明らかになり、育児支援の対象者として両価型のアタッチメントスタイルを持つ者も考慮していかなければならないことを提示できたことは意義がある。

研究成果の概要(英文)：One of the factors of child abuse is the possession of a high level of parenting stress. It is the important issue in terms of the public health point of view. This paper explores the association between a mothers' attachment style and parenting stress among Japanese mothers with toddlers aged 18 months old. We conducted a cross-sectional study in A city, Japan. Public health nurses distributed an anonymous, self-reported questionnaire to 1,399 mothers who attended a health check-up for their infants. Of 1,399 mothers, 529 mothers responded to the survey (37.8%). In multiple logistic regression analysis, ambivalently attached mothers had significantly higher parenting stress than securely attached ones, but avoidantly attached ones did not have significantly higher parenting stress than securely attached ones.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：育児不安 アタッチメントスタイル 内的作業モデル 1歳6ヶ月児

1. 研究開始当初の背景

近年は、核家族化の進行、地域関係の希薄化などから、高い不安・ストレスを抱えながら孤独に育児を行っている母親が増加している。「育児不安」という言葉が、社会問題として1970年代より注目され始めて以降、多くの研究者が育児不安に関する探究を行っている。牧野（1982）は育児不安を「育児行為の中で一時的に生じる疑問や心配ではなく、持続し、蓄積された不安の状態」と定義し、その後、育児不安を測定する尺度の開発（Abidin, 1983）や、育児不安の関連要因（Mulsow et al., 2002）の解明などが盛んに行われた。Belsky（1984）は育児不安に関連する要因として、子どもの要因（年齢、気質、障害など）、母親側の要因（身体的・精神的健康度、自尊感情、子どもへの感受性など）、育児環境（経済状態、夫婦や家族の関係、地域関係など）をあげている。

特に1歳6ヶ月頃の児は乳児期に比べ活動性が増加し、自分で食べるようになることから育児負担が大きく、また、子どもの自我の芽生えと共に乳児期とは異なった親子関係が発展していく時期である。このような変化に対応困難な保護者は育児不安が増大すると考えられる。また、外出する機会も増え家族から地域へと生活の場が拡大するこの時期には、ソーシャルサポートの有無が母親の育児不安に影響しているという報告もある（大重ら, 2016）。

このような背景から、行政や民間団体などによって、様々な育児支援が展開されており、その多くはソーシャルサポートの充実や、育児に関する情報の提供など、母親を取り巻く環境（外的要因）を整備するというものである。しかし、このようなサポート体制の充実に力を入れているにも関わらず、母親たちの育児不安の軽減には至っていない（厚生労働省, 2014）。このことは外的要因だけを整備しても母親の内的要因にアプローチしなければ母親の育児不安が軽減しない可能性を示唆している。

母親の育児不安に影響する内的要因の1つとして考慮すべき点として、Bowlby（1969）によって提唱された愛着理論とともに、そこから形成される「内的作業モデル（アタッチメントスタイル）」が挙げられる。アタッチメントスタイルとは、人生の初期段階において、愛着対象者との相互作用によって形成される内的表象であり、特に、乳幼児期に愛着対象となる人物（多くは母親）に必要な時に接近でき、また保護や支援を受けられることで安定的なアタッチメントスタイルが形成される。そして、それは愛着対象以外の他者との対人関係にも発展していき、青年期、成人期における人間関係構築の基礎となっていく（Bowlby, 1973；遠藤, 1992；丹羽, 2003）。過去の研究では、子どもの育てにくさとアタッチメントスタイルの関連（内田ら, 2011）、母親の養育態度とアタッチメントスタイルとの関連（加藤, 2017）などが分析されている。上述した様に育児不安には様々な要因が複合的に関連しており、それらの影響を考慮した上で母親のアタッチメントスタイルと育児不安の関連を分析していく必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究では、1歳6ヶ月児を育てる母親の育児不安の実態と母親のアタッチメントスタイルとの関連を明らかにすることを目的とする。本研究成果は、育児期のみでなく妊娠期からの育児不安を予防するための支援対策に繋がる基礎資料になると考える。

3. 研究の方法

(1) 研究デザインと対象者

2018年7月6日から2019年5月10日まで、無記名自記式質問紙を用いて、横断研究を行った。日本のA市において保健師が1歳6ヶ月児健診に参加した母親1,399人に質問紙を配布した。A市は西日本に位置する人口約25万人の中核市で、年間の1歳6ヶ月児健診対象者数は約2,000人である。

(2) 調査内容

質問紙は、先行研究を参考に「母親要因」、「子ども要因」、「家族と社会要因」に関する情報から構成されている。

① 基本属性（年齢、教育レベル、就労状況、経済状況、家族構成、現住居の居住期間）

② 育児不安（従属変数）

「現在、育児に関して不安を感じますか？」という質問を用い、母親は「感じる、まあ感じる、あまり感じない、感じない」から回答した。アタッチメントスタイルは1988年に詫摩と戸田によって作成された Internal Working Models (IWM) の尺度で評価した。この尺度は Hazan and Shaver (1987) が提唱した3つのアタッチメントスタイルをベースに開発された。母親たちはそれぞれの質問に1「全く当てはまらない」から7「非常に当てはまる」の7点法で回答した。

IWM 尺度は3つの下位尺度を持つ：安定型アタッチメント（例：私はわりあいたやすく人と親しくなる方だ）、両価／不安型アタッチメント（例：人は本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある）、回避型アタッチメント（例：私はあ

まり人と親しくなるのは好きではない)。3つの下位尺度のうち合計得点の最も高いタイプが回答者のアタッチメントタイプとなる。IWM 尺度の再テスト信頼性、内的一貫性は確認されている。

- ③ 母親要因
母親の主観的健康観、妊娠出産の満足度
- ④ 子ども要因
子どもの性、出生順、発達状況、親が感じる子どもの育てやすさ
- ⑤ 家族と社会要因
パートナーの有無、ソーシャルサポート（育児に関する相談相手や協力者の有無）、地域との交流、地域への信頼

(3) 統計的解析

単変量解析として、育児不安と他の変数の関連を調べるため、カイ二乗検定とコクランアーミテージ検定を行った。育児不安とアタッチメントスタイルとの関連を評価するため、多重ロジスティック回帰分析を行い、オッズ比と 95%信頼区間を算出した。すべての統計的解析は SAS を用いて行った。

(4) 倫理的配慮

本調査は長崎大学大学院医歯薬学総合研究科倫理委員会の承認を得ている（2018年6月20日；承認番号：18011110-2）。

4. 研究成果

(1) 研究結果

研究対象者 1,399 人中、529 人から返信があった（回収率 37.9%）。母親の平均年齢は 33.2 歳（±5.1）で、約 60%の母親は 30～39 歳であった。家族構成に関しては、核家族が約 90%を示した。約 40%の母親が育児不安を抱えていた。アタッチメントスタイルに関しては、3分の2の母親が安定型を示し、20%が両価／不安型、15%が回避型であった。単変量解析の結果、両価／不安型の中で育児不安を抱えている人の割合は、安定型や回避型で育児不安を抱えている人の割合より有意に高かった。

更に、低い経済状況($p=0.008$)、低い主観的健康観($p=0.025$)、子どもを育てにくいと思っている($p=0.002$)、育児について相談する相手がいない($p<0.001$)、育児協力者がいない($p<0.001$)、地域との交流がない($p=0.012$)、地域を信頼していない($p=0.007$)と回答した母親は有意に高い育児不安を示した。

ロジスティック回帰分析の結果、両価／不安型のアタッチメントを持つ母親は安定型を持つ母親より有意に育児不安が高くなった（オッズ比：2.4, 95%CI：1.5-3.9）。一方で回避型の母親と安定型の母親では育児不安に有意な差が認められなかった（オッズ比：0.9, 95%CI：0.5-1.6）。今回の調査では、父親のアタッチメントスタイルに関しては尋ねていない。育児は夫婦で行うものであり、夫のアタッチメントスタイルの育児への影響も今後、考慮していく必要がある。

(2) まとめ

今回の研究でアタッチメントスタイルによって育児不安を抱きやすい人とそうでない人がいることがわかった。育児不安に関連する要因はアタッチメントスタイル以外にも数多くあることが明らかになっているため、それらの要因と一緒にアタッチメントスタイルにも注目することで、1人1人の母親にあった育児支援策を展開していく必要があることが示唆された。

【引用文献】

- Abidin R. (1983). Parenting stress index manual. 1st ed: Pediatric Psychology Press.
- Belsky J. (1984). The determinants of parenting: A process model. *Child Development*, 55, 83-96.
- Bowlby, J. (1969). Attachment and loss: Vol. 1: Attachment Basic Books.
- Bowlby, J. (1973). Attachment and loss: Vol. 2: Separation: Anxiety and anger. Basic Books.
- Hazan, C., & Shaver, P. (1987). Romantic Love Conceptualized as an Attachment Process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52(3), 511-524.
- Mulsow, M., Caldera, Y. M., Pursley, M., Reifman, A., & Huston, A. C. (2002). Multilevel factors influencing maternal stress during the first three years. *Journal of Marriage and Family*, 64(4), 944-956.

内田利広, 古家美保, 河合三奈子. 母親の内的作業モデルから見た「子どもの育てにくさ」に関する研究. *家族心理学研究*. 2011;25(1):56-67.

遠藤利彦. 愛着と表象—愛着研究の最近の動向：内的作業モデル概念とそれをめぐる実証研究の概観—. 1992;35(2):201-33.

大重育美, 顧艶紅, 石垣恭子, 西村治彦. 離島における 1 歳 6 か月健診児をもつ保護者とその祖父母の育児不安に関する実態調査. *小児保健研究*. 2016;75(5):594-601.

加藤孝士. 養育者の内的作業モデルと育児ストレスが養育態度に与える影響. *小児保健研究*. 2017;76(2):162-8.

厚生労働省. 健やか親子 21 (最終評価報告書). 2014. <http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/0000030082.pdf>

詫摩武俊, 戸田弘二. 愛着理論からみた青年の対人態度--成人版愛着スタイル尺度作成の試み. 人文学報. 1988; 196:1-16.

牧野カツコ. 乳幼児をもつ母親の生活と〈育児不安〉. 家庭教育研究紀要. 1982;3:34-56.

丹羽智美. 青年期の親への愛着によるソーシャルサポート. Bulletin of the Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University (Psychology and Human Development Sciences). 2003;50:279-84.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Ayano Kit, Yumiko Moroishi, Satoko Yano, Yusuke Oyama, Sumihisa Honda	4. 巻 64
2. 論文標題 Factors Associated With Parental Readiness Amongst Japanese Female Undergraduate Nursing Students: A Cross-Sectional Study	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Acta Medica Nagasakiensia	6. 最初と最後の頁 15-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 キット彩乃, 諸石有美子, 本田純久
2. 発表標題 看護系女子大学生における親性準備性とその関連要因について
3. 学会等名 日本公衆衛生学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 キット彩乃, 有馬和彦, 水上諭, 富田義人, 西村貴孝, 安部恵代, 青柳潔
2. 発表標題 1歳6か月児を持つ母親の育児不安に関連する要因
3. 学会等名 日本健康学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 キット彩乃, 小森ありさ, 大嶽未由, 田中準一, 本田純久
2. 発表標題 大学生における乳幼児・高齢者接触体験と親性準備性との関連
3. 学会等名 日本子ども虐待防止学会第26回学術集会いしかわ金沢大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 キッド彩乃, 有馬和彦, 水上諭, 富田義人, 西村貴孝, 安部恵代, 青柳潔
2. 発表標題 1歳6か月児を育てる母親におけるソーシャルサポートに焦点を当てた分析
3. 学会等名 日本公衆衛生学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関